

2025年11月総評 菅田真名

受け皿にミルクをしいて  
あなたにも  
嘘がわかると雪はいいます

---

雪永雪道

「受け皿にミルク」はペットへのエサやりだろうか。トレイに広がる白が、窓の外に積もる雪を連想させる。牛乳の白と雪の白、その質感の違いに目を凝らすとき、「嘘」のような濁りを知覚できるようになる。

塩と砂糖まちがったまま薬指

---

ケムニマキコ

既に死語であることを願うが、「モテる女の『さしすせそ』」という、女性のための、対男性の相槌指南のようなものがある。「料理の『さしすせそ』」をもじっているのだ。この句は「薬指」の象徴性もあいまって二種類の「さしすせそ」を同時に思い起こさせるが、「まちがつたまま」が頼もしい。

雪原の絵葉書を見たタイの友  
あたたかそうねと返事をくれる

---

南場 豊子

赤道近くにあるタイに雪が降ることはない。「タイの友」は雪を知らなかったのだろうか。雪原は太陽光を白く跳ね返し、「あたたかそう」に見えなくもないのかもしれない。「雪焼け」という言葉もある。いい歌だ。ただし、詩で人の無知を扱うときはすこし注意が必要かもしれない。

おおきめのうなぎが好きで  
おおきめのうなぎになりたくない  
ひとがすき

---

戸倉田面木

エシカル消費をめぐる議論でしばしば話題に上る、うなぎ。ここでいう「好き」は、おそらく食べ物として好きなのだろう。「なりたくない」のは、食べられたくないからだ。きわめて人間的で、自分勝手である。そのことが、相手を安心させる。

鏡面を保ちつつ湧く水の様に  
怒らないけど許さないから

---

回る卵

噴水のように噴き出す怒りではなく、水位が減りつづけ、やがて枯れる諦念でもない。対象を必要とする「怒る」という行動に移すことは抑制しつつ、湧きつづけているのはやはり、怒りなのだろう。

まぼろしがまぼろしをうむ  
湯葉冷める

---

魚石 ひかり

湯葉のポエジー。川柳には「湯葉すくう 『ほら概念は襲うだろ』」( 清水かおり ) という句がある。「湯」という液体と、「葉」という固体。「まぼろしがまぼろしをうむ」からは、湯葉がひとりでに増殖する様子をイメージさせられる。

風のない眠りに胸は重湯なの

---

彩燈 琴璃

「胸は重湯」という比喩によって強化されるのは、主体がしづかに横たわっているイメージである（立ったり、寝がえりを打ったりしたら、液体がこぼれてしまう）。胸が重湯なら、身体は器である。風に波立つこともない水面をかかえ、こんこんと眠っている。

紅葉してみます

---

桜庭 紀子

「してみます」と言っているのは、木々だろうか。「紅葉の名所に行きます」「紅葉狩りをします」を省略したかたちにも見えるけれども、「してみます」はあまりにも、紅葉の内側に入り込んでいる。

花カンナ晴れているから黙りたい

---

上原一樹

「鰯雲人に告ぐべきことならず」（加藤楸邨）を思い出す。「黙りたい」という願望は、主体が黙ることを許されない状況にあることを示唆する。全体主義とは沈黙を強要されることではなく発言を強要されることだ、という話もある。どこか戦争のにおいがする一句。

往生際だけ上がる舞台に

---

綿貫 文

舞台という空間に実際に「際」があることによって、「往生際」を視覚的にイメージできる。その際、参照されるのは「土俵際」か。「往生際」もどちらかといえば生という舞台から「落ちる」のではないかと思うが、この句では「上が」っているのもおもしろい。